

三郎山論集3（上田女子短期大学 日本語教育研究会・国語研究倶楽部共同機関誌）1996.3

日本語を学んで

李 彤

日本が国際化されるにつれ、日本人と外国人とのコミュニケーションの機会が増えてきている。同時に、日本に興味を持つ外国人も増え、日本語を勉強したいと考える人が多くなってきた。

私もそのような理由で、日本語を勉強したのだろうか。

大学入学試験を受けた頃は、日本の企業やジョイントベンチャーがどんどん進出してきていた。母は、「英語を勉強する人は多すぎて、将来、仕事に生かせるかどうか。日本は世界の中で経済的に非常に力のある国だから、日本語を身につけておけば何かと役立つのでは。就職にも有利だろうし、日本語を勉強してみたら。」と、ある大学の日本語学部を申し込むよう勧めた。

結局、母の望みどおりに、私はその大学の日本語学部に入學となった。それから、日本のことを殆ど知らないで、日本語を勉強し始めた。当初は、いろいろと新しいことがだんだんわかってくるような期待感があった。

中学校・高校時代、私は英語がけっこう得意であったから、大学に入ってから日本語の勉強法を決めていた。ふつう高校では、英語の授業中は、先生の説明を静かに聞いて、ノートをとって、生徒が発言するのは、先生に指名されたり、朗読するときだけである。教室の中は、静かであればあるほど良いクラスだと考えられているかのようだ。けれども、私の高校では、先生は文法説明を中心とした教育をするだけでなく、みんなに自発的な発言の機会をたくさん与えた。そのおかげで、高校卒業の頃には、私は英語を使う国の人々と自由に会話ができた。

「外国語が話せるようになる最も良い方法は、クラスの中では、とにかく積極的に発言することが大事なのである。だから、外国語のクラスは、むしろわいわいと騒がしい（もちろん外国語で騒がしい）ほうが良いクラスなのだ。」

という先生のお話を思い浮かべながら、日本語を習った。大学の授業は、発音練習のクラスの場合、1クラス10人で、発言の機会がたっぷりあった。はじめは、子供のようになか

なかしゃべれなかったが、学んだ言葉を使って、できるだけ積極的に発言した。1年生の終わり頃には、日本語が話せるようになるだろうと、心の中では密かに期待していた。

ところが、入門することは易しいけれど、向上することは難しい。2年生の前期から、授業の時間割はぐっと増えた。日本の地理・歴史・政治・経済など諸方面の知識について、深く学ばねばならず、私は息苦しく感じた。しかし、将来の就職のために、私は無理に一生懸命に勉強した。まるで、勉強の海の中であえぐようだった。

大学の4年間は、本当に奮闘した4年間だ。時々、その時のことを顧みて苦しく思うこともある。が、日本人と自由に日本語で交流できた時、その時の苦しさが、今の楽しさを与えてくれたのだと思う。

4年間の日本語学習の中で、今でも忘れられない先生は、森本という先生である。小学校・中学校の時の厳しい先生は、今でも顔を覚えている。優しい先生は、名前も忘れてしまった。どっちがいいか、わからないが、厳しい方が後ではいい。

森本先生は、顔は優しいが、教え方はあまり優しくない（と、当時は感じていた）。先生は、自分の言葉（日本語）に愛情を持ち、学生に対しても、良い言葉（日本語）を身につけて欲しいと願っていた。少しでも良い言葉を選び、習い、きれいな発音を求める態度を私たちに求めた。その時は、そういう方針が嫌だったが、後になってみると日本語力の向上につながり、良かったと思う。森本先生とは、個人的には親しくならなかったけれど、先生を非常に尊敬した。また、私の卒業論文は、先生の指導の下で完成したので、心から感謝もしている。

私は、中学校時代から、数年間英語を勉強してきて、大学3年の時から、フランス語を2年間習った。そのため、日本語の中にある外来語には興味を持った。英語やフランス語を起源とする語が多いからだ。そこで、4年間の日本語学習のまとめとして、外来語についての論文を書くことにした。それは、私の好きな日本語とも言えよう。

外来語は、日本製片仮名語と言われている。普通に考えれば、外来語が入っていると、日本語を国際語にする方法としては、一番いいと思う。今、片仮名語が増えているのは、ファッションの分野である。漢語と日本語、英語から来た言葉を並べると、イメージや雰囲気随分違う。外来語と日本語を一緒にした「カラオケ」とか「ナツメロ」みたいなものは、とても面白い。英語と中国語、英語と日本語が一緒になって新しい言葉を作るのは本当に面白い。

しかし、私の嫌いな日本語も外来語である。現在、外来語が氾濫している。英語やフラ

ンス語やドイツ語が上手になっても、外来語の意味を正しく知ることはできない。それは「日本製」だからだ。毎日のテレビの広告のせりふの中で、外来語が出て来て、わからないことが時々ある。もし、全部英語で言われれば、外来語で聞くよりもよくわかる。日本人は、外国人だから、外来語はわかるだろうと思うようだが、かえってわからない。ある広告の外来語をよく聞くと、英語の意味は良くわかったが、日本語の中での意味は違っていたことがあった。面白いけれど、困らせるものである。

日本語を学んだせいか、私は日本人に好感を抱いている。日本が第二次世界大戦の焼け跡から立ち上がった事実は、私に日本民族の勤勉さを認識させてくれる。また、輸入される多くの日本製家電製品を見ると、日本人の聡明さと賢さが理解できる。テレビドラマ『おしん』の主人公「おしん」のように、何回挫折しても屈せず、勇気を奮い起こしてやりとげる。困難の前に頭を下げて、消極的になってしまうことは絶対になく、運命に粘り強く取り組み反抗する。そうした民族精神が十分に体现されている。

大学を卒業してから、仕事の関係で日本人と接するようになり、それらの人から、少なからぬ知識を習い、日本社会と日本人をより深く理解するようになった。また、言葉のやりとりを通じ、私は日本人と中国人との言語の使い方に関する習慣の差異を感じ取った。特に「Yes, No」についてである。中国人は率直で、あっさりと答えるが、日本人は逆にあいまいに言葉を使い、善し悪しをはっきり言わない。だから、日本は「Yes, No」を言わない国だと思う。

来日してから、日本の自然はいかにも変化に富んだ美しさがあり、珍しいと感じている。はっきりとした四季の移り変わりがあり、山紫水明を歌う詩や和歌が生まれるのがわかるような気がした。一般の日本人に、旅好きが外国よりもはるかに多いのは、やはり四季と美しい自然に対して、敏感だからだと言えるだろう。

日本で好まれる花というと「桜」があるが、中国人の好きな花は「梅」である。国花としても、忍耐強い性格を尊ぶということを示している。厳しい風土を持つ中国では、自然は日本のような鑑賞の対象ではない。畏怖の対象であり、挑戦の相手である。自然条件が違えば、そこに住む人たちの性格や意識・思考様式は、ある程度違ってくるはずである。日本人の自然美への関心から、芸術美・生活美までを見ていくと、日本人の美的享受への関心がうかがわれる。茶道・花道・書道・剣道などのように、「道」がたくさん出てくる。このような考えが生活の中に溶け込んでいるからこそ、日本の社会は、微妙に調和のとれた発展を成し遂げたように思われる。

中国人が初めて日本に行って、一番煩わしいと感じるのは、日本人の多方面にわたるエチケットであろう。（実際には、そうした礼儀の多くは外国から入ってきたもので、中国がそのルーツと言えようが、そのルーツの国では、今は伝えれていない。）

デパートに入ると、店員が出迎えて言う。「いらっしゃいませ」。陳列台の前に来るとさらにひどくなり、ひっきりなしに「いらっしゃいませ」と呼びかける。

この「いらっしゃいませ。ありがとうございました」のシーンは、私たちのように日本の教養をあまり身につけていない中国人にとって、誠に受け止め難いものがある。というのは、外に出て仕事をし、よその家に行ってお客となる際の礼儀のややこしさが恐ろしく感じられるからである。私たち中国人は、門を閉じて客を断るほかはない。

こうした日本文化の特徴の一つは、他人を自分と同じ存在と認め、お互いに尊重しあうことが自然となっていることである。日本は島国であり、規則は少ないが、法律は完備されている。だから、わずらわしい虚礼や決まりは、日本人の心に悪影響を与えるどころか、むしろ、国の安全と安定を強めてさえいる。

北京に居た時、ある日本の専門家が私に言ったことがある。この人は、門前払いをくうよりも、門を閉めるほうが多かったという。日本人の習慣では、どこに行っても礼儀が先で、ドアを開けても、後の人が入るまで押さえていて手をゆるめない。彼も、中国で外に出ると、いつもそのようにした。ある時、ドアを開けて人が入るのを待っていたが、誰一人として「ありがとう」を言う者はなく、怒った目付きで人を見て、ひま人だと思われたそう。

礼儀の国・中国では、良いことをするのもたやすいことではない。しかし、礼儀は中国が日本に伝えたものであり、中国の同胞が無礼の実態を克服し、礼儀の国の名誉を回復することを期待している。

今回の来日は、大学卒業後、わずか半年間仕事をしたばかりの私にとって、よいチャンスであった。上田女子短期大学での研修は、日本語の勉強を中心にして、日本の諸方面のことを理解することにつながった。ここで学んだことを大切にして、帰国してからも更に研鑽に努め、立派な日本語の通訳になるようがんばるつもりである。

（り　　とう／平成7年度外国人特別研究生／
中国、北京市国際交流服務中心通訳）